

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年  
9月号

毎月23日発行  
通巻421号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成17年9月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷製  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



(奈良市都祁にて) 稲田とコスモス 生駒市 大津美代子さん絵

昭和37年7月23日月次祭法話より

## 現代における宗教改革とは(上)

法主 矢追 日聖(満51歳)

### 宗教で立つお役目

今日は非常に天候に恵まれておりますが、たいへんお暑うございますので、どうかごゆるりと体を崩して聞いてください。

七月も二十三日になりますと夏も本格的でございます。本年度は八月十四日が大倭の例年の東光大祭に当たりますが、これはいつも申し上げておるんですが、旧の七月十五日でございます。東光祭も近づいてまいりますと、何となしに過去何年間の昔が思い出されるのです。

大倭の創建当時におきまして、私は宗教をもって立つ使命を自覚しております。その当時は敗戦後の社会ですから世の中も混沌としておりまして、宗教と言っても、神さん仏さんのことは誰も問題にしなかつた時代でございます。そういう時代に私が、別段、新しい教え、新しい教義というようなものを持っていたわけではありません。

世の中の宗教界や、信仰しておる人達があまりにもの外れな信仰をしておる。これではいくら宗教があつても世の中というものは安定しない。そういった根本問題から直していかなければいけない、というところから出発しておるんです。もちろん私自身にそうしたお役目というものも生まれつき持つておったわけでございます。

皆さん方が神様なり仏様なりに信仰するという時の動機も問題でございます。

過去においての日本人の信仰のあり方というものは、かなわぬ時の神頼みというように、問題にぶつからなければ手を合わしたり、神様に帰依しないというような伝統習慣があるんですね。これは代々の日本宗教の大きな欠点だと思っております。

私は終戦後において、大倭を中心として旗揚げしたわけでございますが、その時代に集まってくる人達は病気で困っているとか、あるいはまた自分の家はやること成すこと都合よくいかないとか、実際問題の悩み苦しみというものを引っ下げて来る場合が、あまりにも多かったです。

純粹に宗教を求めるとか、社会の安定のために宗教的社会運動をやるうといった高尚な人はその当時、誰も来なかつたですね。そういうような時代でもありました。

一応私にもそういうことが分らんでもないんです。例えば、医者にかかっておつてもさっぱり効果がでないというような病人に來られた時に、宗教的に考えてみれば、治れば結構だし治らなければそこのまでの寿命、寿命が尽きて死んで行くのは神ながらだと言えはそれまでです。

## 病氣治療は専門でない

宗教というのは病氣を治すというのが目的ではない。要するに死ぬものは死ぬ、生きるものは生きると言え、これが一番いいんです。私が見てどうしても方法がないという場合は、宗教的に悟りを持たして、これはここまでの天の定めであると言えはもうそれでお終いなんです。

しかし、まだ生命力があり生きるだけの力があるのに治らない。医者に掛かり薬を飲んでいるのに医者としても病名がはつきりしない。どこから病氣が來ているのかも分からない。そして毎日

あれでもないこれでもない薬を与える。そんなると薬の化学的な中毒症状を起こして頭の中が変になって來ている。それが原因となってまた別の病が発生してくる、というような悪循環をやつておる長患いの人がかなりあるわけですね。

そういう方々が持つて來られた病氣を治すというのは医者の領域を侵すことになるんです。

私が見ますと、人間以外の何かの一つの靈魂です、畜生の場合もあれば人間の場合もあるし、中には不思議にも自然の靈といったものにひつかかって患つておる人がいるんです。その原因が分からなければそれで事はお終いなんです。が、たまに、私に分かるものですか、こうしてやれば治るだろうなあと思えば、それは人情の問題ですから、この人の家庭も仕合せになるだろうし、本人も喜ぶだろうというような解釈のもとに大倭の創建当初におきましては、かなり病人を扱つてきておりました。

加持祈祷を専門とするのは、例えば修驗道の方でもたくさん行者というものがおりますし、仏教の方では日蓮宗とか真言密教は相当やつておるわけです。ところが、私自身は祈祷したり、あるいは心靈の力、靈能力で病氣を治すということは、夢にも考えていないのです。

「自分は、そういうような病氣治しが専門じゃないんだ。仮に治つたところで死ぬまでかかつても何人の病人を助けることが出来るんだらうか。またそこで肉体が維持できなければ、なんぼ靈の力といつても、もう治らない病氣もたくさんある、死んでいく人もたくさんある。まあ、半数よくなれば結構だけれど、医者責任範囲もあるんだ」という思いなんです。

私は宗教が本職であるんですけれども、なまじつかそういうようなことが分かるものですから、

どうも世話のしやすい立場にあるんです。

しかし、治るべき病氣、いわゆる靈障害によつて苦しんでおる場合、これはもう医者でも薬でも治らないといった時に、良心的に見て自分にそれだけの自信があれば、その靈障害を外してやる。

そうすれば後は自分の肉体の養生によつていい方向に向いてゆく。考えようによつては、それによつて病氣の人も救われるし、その家庭を助けるという半面があるんですね。

病人があるためにその家庭が不幸で、仮に病氣が治つてくれればその家庭が仕合せになるだろうという宗教的な見解において、病氣の方も扱つてきたわけです。

そして、仮に治つたとしても、「大倭の神さんを信仰して、大倭の神さんのおかげで自分の病氣が治つたんだ」というようなことは他の人に言わないでくれと私はいつも口止めしてあるんです。

## 永久の救済ではない

宗教的立場において、相手の家の苦悩を除くため、相手の人が仕合せになるために靈障害による病氣も扱つておるわけです。病氣そのものが治る場合もあるし、治らない場合もあります。全部が治るとは限つていないんです。

けれども医者が手を離れたような病氣ですね、そういうものでもかなりは事実において治つてくる。それがために喜びのあまりと申しますか、

「自分はこういう病氣を助けてもらったんや、大倭の神さんはようみはる」とか、「大倭の神さんはよう効く」とかというような世俗的な話し方で人に勧めるような人もあるんですね。これも非常にまた困ると思つてるんです。

たとえ大倭に出てきて病氣が治つたと仮定して

もまた何年か経てば病気にもなるんです。いずれは寿命が尽きてお迎えがくる、死んでいくと決まっているんです。永久の助け、救済にはならんです。要するに肉体の病気が治ったからといって一時的な喜びをして、この神さんは結構だと一生懸命に拝んだところが、治らない病気の日もまた出てくるんです。

そういった時に喜びの裏が出てくる。すると、「いや、あの神さんは効かなくなってきた」とか、「あの神さんはあかん」というように、自分の得手勝手に判断して価値をつけるというようなのは、宗教なり神様というものに対し本当の冒瀆なんです。それだから現世利益というようなのは、中心として人に信仰を勧めるところは、罪悪です。これは本当に慎まなければならない、あべこべに神様を冒瀆することになるんです。

ところが、世間の宗教、現実の宗教をつらつらと見れば、ほとんどがそうした現世利益というものを目的として人に勧め、また現世利益を与えるために存在しておるようないき方をしている宗教団体があまりにも多すぎるんです。非常に嘆かわしいことなんです。

## 太陽の存在になるように

といって私一人がこのようなことを申し上げておつても何の屁のつっぱりにもなりません。天に満ちる星の数ほど宗教というものがありまして、一度太陽が現れた場合には、自ずから星はかき消されてしまうんですから、結局これは時機の問題、時間の問題であるんです。

大倭はこの太陽の存在になれば結構なんです。うぬぼれかも知れませんが、そうならなければならぬと私は自覚しておるんです。このうぬぼれ

が、もし本当に自分のうぬぼれであつて間違いであれば、私は一生の間どれだけ努力したつてだめなんです。私は幸いにしてそういうような宿命を持つておるといふ自覚を持っています。

そういう意味で今後の日本の宗教界において、この大倭というものが、太陽の存在になるように現在は歩んでいる。けれど、今はまだ東の山から太陽が頭を出していないという状況にあるんです。まあ世の中は真つ暗闇であり星は光っているけれども暁は近いという状況のように受け取れるんです。

私も五十を越えてまいりましたので、この世に於いての人間として、仕事の上からも年齢の上から考えましても、もうそろそろこの時機が来たんじゃないか、あと二、三年のうちにある程度そうした方面において積極的に動かされるだろうと思つていっているんです。

非常に消極的に聞こえますが、私の宗教観というものは、「神ながら」ということに徹しきつていっているんです。自然の成り行きに添うということなんです。自然というのは神意であり神様の心であります。

結局、無計画の中においての計画です。世の中の大自然の姿をみても無統制のように見えておりますが、全部が統制されているんです。けれども無統制のように見えているのです。

私自身の一生の運命というものも、本当は何にも束縛されていない自由な立場であります。けれども、そこにはまた目には見えない一つの束縛がある。束縛と言うと言葉とすれば汚いですが、言い換えると運命的な線というものの、一つのレールが引かれている、その上を私が走る役目なんですね。私自身が受けてきた宿命だけの範囲において私は動けるのです。

自分の使命以外のことにどれだけ動いても無駄なんです。私の使命の範囲内のことは、私自身が人間的な頭で解釈したり計画しなくても、これは私が世の中に生まれてきた一つの運命としてあるんです。その運命、宿命の裏にある神意、その神意のまにまに私自身は十二分に現在まで動いてきておるはずなんです。これから先もそうなるだろうと思つていっているんです。

## 「利益信仰はなぜ邪道か

今の言葉で言えば宗教の改革というようなことになってくるんですが、この現世利益を中心とした宗教は邪道であるということを真向から宣言しなくてはいけないと私は思っています。けれども宣言するには、その裏付けがなければいけないんですね。

何がためにご利益中心の信仰というものが罪悪であり間違っているかと言えば、ご利益中心主義に固まっている人達は、神様の心というものが、神意というものが分からない。だからそうした信仰に固まつていく人ほどあべこべに人格が低下していく。それが大きな社会の罪悪なんです。

仮にご利益信仰でもよろしいが、その一つの信仰を持つことによつて人格の方が、唯一絶対な神に近づいていくならば話は分かるんです。

けれどもあまりにも利己主義、エゴイズムの気持ちになりすぎる。そうした時に神様の目から見れば悪魔を養成していることになるんです。どうせ七十か八十になったら死ぬことは分かっているが、不養生とかその原因を自分で作つておるということをおぼれまして、ただ神様に、「助けてくれ助けてくれ」と言つて、助かった場合に、「あの神様は立派な神様だ、よう効くえらい神様

だ」、助からなければ、「あの神様はあかん」というような、ご利益信仰というものはそういう人格の低い、低級な人間を養成しておるんですね。人間の欲望としては汚い欲望ですよ。

それは神様が理想とする世界と月とすっぽんほどの相違がある。これじゃいけない。

そのように私は神様から——神様と言ってもいわゆる人格神ですが——言われているのです。ご利益中心の信仰は本当の罪悪であるから、こういったものを今の時代に全部改めなければいけないと、いつも人格神から聞かされるのです。

(続く)

# 昇ちゃん 欽ちゃん 宅訪問記

湯浅 芳郎

## 8月20日(第1日目)

大倭を昇ちゃんと欽ちゃん(中野英樹君)と三人で出発、京都から新幹線、皆ご機嫌。目的地は欽ちゃんの住まい、栃木県芳賀郡茂木町。東京から常磐線、水郡線で常陸大宮につく。そこに奥さんの聖子さんと道大君(三歳)が車で迎えにきていた。昇ちゃん道大君と再会して大喜び。七時半ごろ家に着くと近所の友人、矢野さんがお寿司の差し入れ。美味しくいただく。夕食後、昇ちゃんの機嫌が悪い。どうも聖子さんが痩せているのを見て(平生見ている周りの人との単なる比較に過ぎないが)欽ちゃんは酒飲んで仕事をしない、なんて説教でした。どうも夕食にビールをコップ二杯飲ませたのがいけなかったらしい。この家には主人がしっかりといていないのでテレビも扇風機も無い、欽ちゃんと小生は新幹線の中で見ていても酒ばかり飲んでると言い怒り出した。聖子さんは道大君を背負って暑い中で畑を耕したりして汗水を流しているはずだ、明日からの力ヌーも魚釣

## 「ぼれずみ

大阪府大東市 坂田 洋美

この頃、若い人との会話で、法主さんからお聞きした言葉をよくしゃべっている私がいまです。

「お墓はチャンネルを合わせるとこや」「神社にはわしらと同じように飯食って糞こいて生きてた人が祀つてある」「お供えしたものは心で食べはる」とか霊人との付き合い方とかでしょうか。テンプ起こしをさせて頂いて、よく聴くとはこういうことかと深いお心に出会わせて頂けて感謝です。言葉や理屈でなくて、縁りの先輩方にもならず、神を宿すということ、その心そのままに生きるということをお身に付けたいです。

りも中止、三人でどんどん働くこと。へー。なんのこつちゃ。

## 8月21日(第2日目)

朝食後、二人で陶芸窯用の薪造り、三十分で一本の木を切つてもう終了。昇ちゃんが持っていたゴムボートを、宅急便で送つておいたので組み立てにかかると、裏の那珂川に運んで乗って遊ぶ。昨晚の「働く誓い」はどこに行つてしまったの。その後、これも持参した釣竿で魚釣り開始。早速昇ちゃんの針にあほな魚がかかる。21センチ。小生は実力で20センチ一匹、終り方に昇ちゃんもう一匹、大いに喜ぶ。家に帰り魚拓を採る。夕方からカヌーに出かける。昇ちゃん 欽ちゃん組と友人の矢野さん 道大君 小生組、二艘の大型カヌーで一時間下る。昇ちゃんバドル捌き見事。気持ちよさそうでした。なかなか上手でした。

## 8月22日(第3日目)

一泊で中禅寺湖にキャンプに車で出かける。途中、日光「猿軍団」によりショーを一時間見る。

猿が怒られるのを同情して怒る事頻り。湖畔の菖蒲ヶ浜でキャンプ。昇ちゃんがカヌーを作つてくれる。皆美味しいと言つて食べる。昇ちゃん深々とアームチェアに座りシエフ気取り。二つのテントで寝る。聞こえるは道大の鼾のみ。

## 8月23日(第4日目)

コーヒを沸かし朝食。その後、戦場ヶ原で散策一時間。奥日光湯元温泉の温泉寺で温泉に入る。それから待望の土産を買う。最初七個の予定が何時の間にか五個になる。小遣いを余らせたらしい。昼食は湖畔の「たびや食堂」そこで剥製の一メートルばかりの大きなマスを見てびっくり。昨日の釣りの小生との釣果の喧嘩は問題外となる。六時ごろ家に到着、夕食。その後、昇ちゃん機嫌が悪い。そろそろ旅の終わりと思つていられるらしい。もう一日あると気が付いて収まる。

## 8月24日(第5日目)

朝から雨が降る。今日は屋内行動なので大丈夫。それでも欽ちゃんと昇ちゃんは釣りに出かける。大きな鯉を逃がしたらしい。逃がした魚がだんだん大きくなる。小生は休養。午後、最後の楽しみ——陶芸(欽ちゃんの本職)を始める。轆轤を足でまわす。中々手つきは良いが思うような連動が思



うようにはいかな。手ほどきを受けて



各自二点ずつ作り、後で焼いて送っていたりととす。打上げの夕食はレストランで豪華に。昇ちゃんの旧暦の誕生日祝いとする。230グラムのステーキをべろりと食べる。今回、生前供養と思ったがこれでは当分大丈夫。

8月25日(第6日)

お別れの日。昇ちゃん、目をばちばち。バス停

## 再掲載 特集 「大倭にかけぬゆめ」より 冊子『大倭』昭和42(1967)年10・11・12月合併号より

### かぎりなきおおやまと

杉山龍丸

鶴見俊輔氏の紹介で、大倭から今村忠生さんとお友達で、私の福岡市の事務所に来られ、もう三年余になるであろうか。入って来るなり、私が神主であるということでしたが、ということでも私の方がびつくりした。大倭と私の御縁は、この訪問がきっかけで、私もいろいろの世界を歩いて、また沢山の人に会って、大抵驚かない方であると、うぬぼれていたが、大倭を訪ねて、率直に申して私の知らぬ世界がそこにあつた。

まだ、私は大倭のことをかれこれ言うことは、どうであろうかと思っている。それは、私がいつも技術者としての立場から人間の生活を考えているものと、大倭の矢追日聖法主の到達されているものとは、大分隔たりがあると思うからである。

この隔たりは、矢追日聖法主のこれまで人の生きるということに精進されてきたものと、私が今出発点に立って、やろうとしているものとの距離的、深淺の深さの違いであつて、決して全く違った世界、話のできぬ隔たりではない。

私は、矢追日聖法主からこの大事な根本問題につき、ゆつくりお話を聞こうと思ひ、また、法主

まで皆で送っていた。高速バスで東京へ。さような。新幹線は大阪へ、台風が関東へ、危機一発のすれ違い。ついでに。昇ちゃん、新幹線の中では「ごたごた」言い出す。折りよく台風十一号襲来を理由に今回は何とか大倭まで直行六時ごろ帰着。やれやれ。欽ちゃんご一家、近所の矢野さん、そして心配しながらサポートしていた

も度々その気になられて、口を切り出しかられた気があつたが、同席の人が用事があつて出発されたり、いろいろの気が動いて、また私の気の充実ができない状況があつて、折角の機会を逃している。

この問題は、法主さんと私の間の問題のみでない。私の父、夢野久作は、かつて禅宗の僧となり、大和路を雲水として歩いており、父が六十になり、私が三十になつたら、二人で雲水となつて歩く約束をしていた。

父は私にいろいろのことを話して、また教えていて、四十八で死んだ。私も父が死んだ四十八歳になつて、父の言葉を思うとき、はつと、ああ、あれは、このことだつたと思うことが多い。

私が、矢追日聖法主に会つて最初に感じたのは、父のこれらの言葉であつた。父は、私にいろいろの例、いろいろの物を使つて私にわからせようと、努力していたものがあつた。

それは、言葉で、また文字でも表わすことのできないものである。インドのヒンズー教では、大宇宙をクリエイト(※注 創造)していく真理と神を感得して、ブラフマン(※注 梵)宇宙の最高原理を神格化)として立つとき発するものをオームということである。

日本ではこれを阿吽(あうん)といつてゐる。言葉になら

いた方々有難うございました。

【欽ちゃんのメールから】

我家もたくさん楽しませてもらいました。いやー色々遊びました。こんなにたくさん遊んだのは久しぶりです。おかげで仕事も頑張れそうです。ショウチャンの心も微妙でいつもいつしよにいる皆さんの苦勞が千分の一位わかりました。(笑)

ぬ言葉、音声に満ちているもの、それは感ずるより外はない。

大倭心はそれがある。法主は、これを靈と言われるのであろうか。むすびは、自覚するといなにかかわらぬ、人の生きてゐる、創造している中にひそむ。これがむすびはれてゆくのであろう。私には、まだこの程度しかわかつていない。

私が大倭を訪れるとき、また、インドのガンジー塾に行つたとき感ずるのは、いづれも大地からふつと、大宇宙にあるものとむすびはれて、生まれ、創造していつている何ものかがあつたことである。

今年の七月三十日、大倭のむすびの家が、大倭の地に集まつたFIWCの若人の手で完成した。技術者のはしりである私は、その建設途中を見たとき、あつげにとられた。私も、満州で、戦地で、ずいぶん乱暴な建設を飛行場や兵舎の建設でやつたが、このむすびの家の建設のようなのは、はじめてであつた。しかし、念のために言つておく。乱暴な作り方であるが、鉄骨もセメントも充分すぎるほど使つて、強度上は充分であらう。あつとというより外に表現のしかたはない。少なくとも私がやれば、もう少し強度の上で合理的にやるであらうが、計算を度外視した若い人の意気から生まれた建物というより、むすびれた産物であ

る。(中略)

今年の八月十三日、今村さんから速達が舞い込んだ。福岡のお盆の仏様を迎える日で、私も朝にいろいろな仕事をし、昼食をしていたときで、何の気もなしに救らいのキヤラバン隊の計画を九月と想って放り出していたら、長男(※満丸)が「お父ちゃんこれ、今日の十三時に福岡に着くようになっているよ」という。口に入れたばかりの素麺を呑み込みながら時計を見ると、もう十三時を過ぎていた。慌てたのなんの、とに角、計画書をワシツカミして、ハイヤーで宿舍に馳せつけた。どうも私には一時が万事、大倭は理解できぬことばかりである。何が生まれるのか、何ができるのか、さっぱりわからぬ。無限の可能性の面白さも知れない。

昨年の七月、ひよいと大倭を訪れると、柴地則之さんが「印刷所を作りました、こんなものができます」と、オフセットのタブロイド印刷のパンフレットを見せてくれた。私もひよいと、四年前のインドを歩いたものを本にしてみる気になって、原稿を十日間こもって書き、送った。勿論、私は本を作るのはじめてである。柴地さんが、鶴見さんの愛弟子で、しかも新聞学科出身であるというので、同志社大学と言えば、大学に行ったことのない私にとって、大変能力者の行くところであろうと思え、柴地さんを頼りにしてぶっつけてみたのである。

後で聞くと、柴地さんも大変困っているらしい。もういやになるくらい苦心されたらしい。一部分の版組みを直してもらったときには、印刷技術云々を一通り聞かされた。私も全くの素人で、自費出版の注文主の特権で無理矢理に直してもらったが、思いがけない出来となって、パンフレットより数段の出来栄で、私も嬉しかった。

今村さんから、私が今アジアの問題、特にインドのガンジー塾に根拠をおき国際文化福祉協会を作ろうとしているのを、大倭にもという希望が持ち込まれてきた。しかし、私はまだ、大倭というものが、はっきり呑み込めていないので、大倭は大倭で独自の発展をしていくのが望ましいと考へ、私のように祖先からのいろいろなものを整理して、今やと私なりに方向づけていく段階にある者からは、私のものを持ち込んであししろ、こうしろと言うことはさしひかえた方がよいであろうと思っている。

福岡人として私から言うとなんとも変なものになるが、アジア大陸からのものが考古学上実証されたものの外、歴史に顕れていないものも、福岡の大地から生まれたものとむすびつき、それから生まれたものが大和地方に吸収されて、日本の文化は発展していつているように思われる。福岡に生まれた何を大和に吸収し、そこに新しい創造が生まれていったか。

私の大倭訪問には、三十余年前に、大和を歩いてみようと父と約束して果たせなかったことの何かが、潜んでいるのではないかと、おぼろげながら感じたのであるが、まだ私の心にこれだとはつきりすることができないままである。

矢追日聖法主は、それをある形ではつきりつかんでおられるのではあるまいかと私は思っている。この点を法主と一度ゆつくりお話する機会を持ち、私としても何らかのことをして大倭のお役に立つことがないかというのが今の私の心境である。

この機会は、望んでも無理に作っても無駄なこと、自然のめぐりあわせ、とりあわせが生まれることが必要である。人にはそれぞれ、その人の持ち分があり、またそれぞれの努力の積み重なり

がある。

矢追日聖法主が、今の紫陽花邑に到られるまでのものがあることを忘れてはなるまい。本として出ている紫陽花邑のことを、皆がどのように読んだか、私にはわからない。

大倭会館が作られるということであるが、形が作られていくと、かえって本質的なものがわかり難くなっていくのではあるまいか。

これは大倭会館のできるのを反対する意味でない。単なる感情的なあこがれ、雰囲気につられるよりも、大倭にあるもの、矢追日聖法主が持つておられるものに気がつかれるように、大和の大地が生んでいるもの、わきあがり、むすばれていくものに気がついてほしいと思う。

法華経に、釈尊が道を説かれるのに、「私の体についているものは櫛も金銀の首かざりもすべてやつてもよい。しかし、私の頭の中にある妙珠は、私がやろうとしてもやることができぬし、また、私を殺してとろうとしてもとることができないものである」と言われていると記憶している。私も長い間考えて、釈尊と同心、同体となつたら釈尊の妙珠は自然に私のものとなるであろうと思つた。

なるか、ならぬか、それはわからない。釈尊は、同心、同体になれとは述べてなく、ただ、やることはできないと言われただけである。

これと大倭のこれから何の関係があるのか私にはわからぬ。まだ、私には、あつけにとられたり、びつくりさせられたり、あきれたり、慌てさせられたりの連続で、柴地さんの大倭にかける夢という希望にはほど遠いが、お互いに星雲みたいであつて、大倭はもう恒星の矢追日聖法主があり、私はまだあちこち飛び歩いている身である。

【昭和62(1987)年9月20日、68歳で帰幽】

# 寸 紗

第66回

紀 戸 太 典 さん



## 父の面影に支えられて

今回は、奈良県立菅原園（身体障害者療護施設）の介護課長である紀戸太典さんの人生に迫った。インタビューに率直に答えてくれた。

太典さんは、昭和五十年の夏、大阪の高槻で三人姉弟の長男として生まれた。現在三十歳。父親の心身さんは小学校の教員、母親の恵子さんは保育士だった。家族は仲が良く、「何でも隠し事なく話せた」と言う。両親からは常々、「人間相手の仕事ほど面白いものはない」と聞かされていた。この心が、後に太典さんを福祉の仕事に向かわせる事になる。

家族の安心感の中で育った太典さんは、「勉強は出来なかったが運動はよく出来た」。小学校の六年間は軟式の野球チームに入り、キャプテンも務めた。だが、この時期にメンパーからのいじめに遭う。「今と違

ての事ばかりであった。高校を卒業してからは専門学校に進むつもりであったが、父親が、「大学は学校の勉強だけでなく社会勉強をする所だ」と勉強以外の利点を押しした。勉強が出来たお姉さんに引け目を感じていた事を知ってか、「お前には姉ちゃんにない良い所がある」と言ってくれたのが太典さんの自信となった。

花園大学に入学。二十歳でタバコを吸う事を覚えた。タバコが長年の緊張をほぐしてくれた。救われた。アルバイトは大好きで、派遣のバイトを通じて様々な職種を体験した。「福祉以外の仕事の厳しさも知る事が出来たのは良かった」。ある時、バイト先の危なそうなトラックの運ちゃんに、「やばいぞ！そんな真面目に生き過ぎたら。結婚するまでは普通に遊べ。でないと結婚してから狂うぞ」と言われたのが心に残る。

女性に縁のなかった太典さんは、友人に誘われコンパに参加。その時に出会った女性とつき合い始め、貢ぐ君と化した事もあった。ギャンブルにも夢中になり、一通りの事はしてきたので今では遊ぶ事も無い。これらの経験は、人間の幅を広げる事に繋がったようである。大倭安宿苑に就職したのは、大学三年の時に実習先として長曽根寮に

来た事による。後に菅原園でもボランティアをさせて頂いた。重度障害をもった人達に出会い、「カルチャーショックでした。どう介護していいのかわからないのか」戸惑った。太典さんは介護がしたかった。「当時は一部の人しか見えてなかったのですが、利用者の凄いパワーや、ギャグの面白さに惹かれた」と言う。「今も仲間と共に、現場で人と接しているのが楽しい」仕事にける情熱を感じた。

二十六歳で同僚の美奈子さんと結婚。長男の崇心君三歳、長女の綾女さん零歳の父親である。出産の時は、「私がかんない思いをするんやから、あんたも見とき」と奥さんに言われ、立ち合った。感動で泣けた。今では貢ぎパパ？となっている。

一番つらかった事は、父親の心身さんの体に癌が発見されてから帰幽するまでの一年間である。五十六歳の若さだった。太典さんにとつて心身さんは最も強い存在であった。

お酒が好きだった父親と一度だけ飲みに行った。父親は嬉しくてペロペロに酔っていた。「もつと色んな事を教わりたいかった」と太典さんは語る。

溢れんばかりの友人に見送られ、生前は好き勝手したように見えた父親が、実は見えない所で家族を支えていた大黒柱であった。

（聞き手〓李 章根）

# A W T C 日誌

8月15日 大倭教立教開宣記念日  
で満60年終戦記念日。40名近くが大倭神宮の祭典に参加され、大阪の藤間綾葉(中川昌子)さんは舞を奉納されました。雲は厚かったのですが、終始涼しい風のある一日でした。

また交流の家では故平山久さんの命日で、福田三郎 同 典子 湯浅進 安本雅一 今村忠生さん等が今年も集い、それは自然にキャンパー仲間の合同慰霊の会になりました。

8月19日 東光大祭及び祖霊祭。雨が降り出し祖霊祭は奥津斎庭から瑞光院に場所を移して行われました。祭典後5時から大倭会館で直会。ゆつくりと飲談後、東方碑前で雲から顔を出

した満月を皆でしばらく眺めました  
8月23日 大倭大本宮月次祭。  
8月27日 弥栄踊りが催されました、朝、参集前に清めの雨、8時から会場設置と売店準備のため40名超の人達が集まってくれました。夕暮れには音頭取り「音丸会」

ご一行も到着、7時から、「江州音頭」と「河内音頭」を交互に、老いも若きも10時45分まで



踊りました。大盛會。夜中の雨を考えて提灯を片付け、打ち上げ会を終了したのは12時過ぎ。皆、ほんまに「苦勞さんでした」。

8月28日 昨夜飲んで騒いだ面々も8時には集合して、午前中、会場の後片付けをしました。

9月2日 杉本順一さん等は陸奥の国へ慰霊の旅に行きました。4日まで。(詳しくは次月号で記事に)

9月3日 夜、大倭会館で弥栄踊りの反省会。初回から40年に亘って続けられたこの催しの総括がなされ、今後は、再出発の方向で話し合われるそうです。

9月6日 大倭神宮の月次祭。数分間の雨のため結局、祭典は社務所で行われました。

この日は昭和25年帰幽された、大倭教教母妙月かあさんのご命日でした。  
夜、大倭会館で邑倭の会が開かれました。  
また、大倭殖産(株) 大倭印刷(株)の来年用カレンダーの印刷開始。顧客に配るためのものですが、『おおやまと』の表紙等から取った写真や、法主寸言から選んだ今月の言葉が、大倭会や購読者の皆さんにも好評であるため、今年は若干多目を心掛けて印刷してくれる由、ご希望の方は一報下さい。

9月9日 建替え工事中として初めて、菅原園本館で合同防災訓練を実施しました。  
8月4日 イチゴ・レモン・ミルク等で、かき氷大会。

9月18日 竹を切り、食堂で流しそうめんを楽しましました。

9月9日 建替え工事中として初めて、菅原園本館で合同防災訓練を実施しました。

(須加宮寮)  
8月21日 「ファイディング二毛」のビデオ鑑賞会。  
(長曾根寮)  
9月10日 衆議院議員等不在者投票を行いました。  
(八重垣園)  
8月19日 3階ロビーへ鈴虫を頂きました。  
9月1日 園単独の防災訓練。

# A T M i C

\* 月次祭(大倭神宮)  
10月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 大倭会主催第四三回祝会  
10月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。(11月の祝会は文化講演会となります)

\* 月次祭(大倭神宮)  
10月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 月次祭(大倭大本宮)  
10月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

## 第286回 大倭会文化行事

### 秋の一泊旅行のご案内

—日本海・丹後の神々を訪ねる—

日時:平成17年10月30日(日)~31日(月)

行き先:日本海・丹後方面

豊受大神社、皇大神社(京都府大江町)

出石散策

お泊り:朝野家 電話 0796-92-1000

兵庫県美方郡 湯村温泉

定員:50名程度

費用:2万8千円

申込み:10月10日までに代金を添えて

世話人へ

世話人:湯浅芳郎 電話 0742-48-3389  
090-6987-5847

## 第17回 大倭会文化講演会

日時 平成17年11月13日(日)

午後2時より

場所 大倭紫陽花邑 拜殿

講師 亀山房代さん

タイトル「これが私の生きる道」

講師プロフィール

亀山さんは漫才師として「上方お笑い大賞」を受賞。長年、中学や高校において「性教育」についての講演を行って来られ、今年3月迄の1年間は「NHK中国語講座」のレギュラーとしても活躍。現在毎朝11時からのNHK「くらつと関西」に出演中。

## 田んぼ通信

### 稲刈りと棹掛けのご案内

10月10日(祝)

午前9:30~

実りの秋が近づいてきました。天候にも恵まれ、稲は元気です。ふるってご参加下さい。

#### \*服装

長袖・長ズボン・長靴。帽子とタオルは各自ご用意下さい。軍手と鎌は用意してあります。

#### \*昼食・飲み物

ご用意します。(差し入れ歓迎)

連絡先 TEL 0742-41-4615 (玄徳院)